JAPAN CLUB ZURICH ❄ SEIT 1961

EDELWEISS

FEBRUAR 2023

今年もどうぞ よろしくお願いします！

2023年皆様どのようにお過ごしですか？コロナだけでなく、インフルエンザも流行っていますが、そのせいもあり、パンデミックからは移行しているようです。

そんな状況も鑑みて、「会員が一堂に集まる機会が懐かしい」というリクエストも多かったことから、３年ぶりのJCZ総会・新年会開催に踏み切りました。約150名が集まるという光景すら遠い昔の幻のようです。総会では、当会名誉会長の藤山大使をはじめ、新しい理事達が選出・承認されました。これから益々繁栄させていこうというJCZのエネルギーを感じて頂けたことと思います。

また感染予防対策の一環として、今年はチャリティートンボラを諦め、1人1つの番号でKinderspital移転増築のための寄付を募り、抽選で豪華景品も当たるという形式を取りました。景品をご提供下さった企業や個人の皆様、寄付を戴いた参加者の皆様のお気持ちを、地域に還元する趣旨でKinderspitalに寄付させて頂きます。

食後に阿部牧子さんのヴァイオリンと吉田啓晃さんのチェロの音色が会場に満ちると、３年ぶりに集えた皆と共に、若さ溢れる生演奏を楽しめる至福感に包まれました。今年残念ながらご参加頂けなかった皆様も、来年はお目にかかれる事をスタッフ一同願っております。

そして2月のイベントはグラスホッパークラブで活躍中の３人の日本人サッカー選手との「ご飯会」です。定員になり次第締め切りますので、お早めにP7をご覧下さい。また、全ての運営は皆様の会費より成り立っています。新年会に参加しない年は会費を納め忘れたりしやすいですが、未納の方はお振込をお願い申し上げます！ (SN)

JCZ Neujahrsparty

● **巻頭文**
『日本の力は破壊する力ではなく、造り変える力である』 青砥 玄 (会長)

● **私のイチオシ、シェアします！**
『空飛ぶ船が見れる島・ランペドゥーサ島』 市居 卓哉

● **スイスの金融市場** Vol.1
『小さな金融大国』 長田 忠雄

● **美のプリズム** Vol. 19
『リートベルク美術館芸術が辿ってきた道』 柿沼 万里江

JCZ賛助団体
（アルファベット順）
Kowa Holdings/Pharmaceutical Europe AG
Kuoni Global Travel Services (Schweiz) AG/JTB Corp.
NIPPON EXPRESS (SCHWEIZ) AG
Nishi Japan Shop/Japan Restaurant Bimi & Saku
TOYOTA AG

「日本の力は破壊する力ではなく、造り変える力である」

巻頭文：青砥 玄（会長）

かつて私は、ある欧州の学者から質問を受けました。「日本は神道の国ですね。其処へ６世紀に仏教が入ってきた時、なぜ戦わなかったのか？なぜ融合できたのか？」その教授は、現代の宗教戦争という対立を解決する鍵を探して研究をされており、日本の歴史の中にそれを解決するヒントがあるのではないかと考えておられました。

実はそのヒントを提示していた作家が、芥川龍之介なのです。彼が大正10年に書いた短編に「神々の微笑」があります。芥川はその短編の中で「日本の力は破壊する力ではなく、造り変える力だ！」と喝破します。その重要性について遠藤周作氏も小説「沈黙」の中で触れています。最近では、元ウクライナ大使の、馬渕睦夫氏が分かりやすく説明されていますので、馬渕氏の著作「新国体論」を紹介しながら皆様と一緒に考えてみたいと思います。

この短編「神々の微笑」は、安土桃山時代に活躍した実在の宣教師オルガンティノと、日本を守護している老人の霊との対話を描いたものです。この中で、オルガンティノは日本におけるキリスト教の布教がいかに困難を極めるかの心情を、次のように吐露しています。

「この国は山にも森にも、或いは家々の並んだ町にも、なにか不思議な力が潜んで居ります。そうしてそれが、冥冥の中に、私の使命を妨げて居ります。さもなければ私はこの頃のように、なんの理由もない憂鬱の底へ、沈んでしまう筈はございますまい。ではその力とは何であるかそれは私にはわかりません。が、兎に角その力は，丁度地下の泉のように、この国全体へ行き渡って居ります。まずこの力を破らなければ、おお、南無大慈大悲の泥鳥須（デウス）如来！　邪宗に惑溺した日本人はハライソ（天界）の荘厳を拝することも、永久にないかも存じません。・・・私は使命を果たす為には、この国の山川に潜んでいる力と、・・・多分は人間に見えない霊と、戦わなければなりません。・・・」

このような日々を過ごすオルガンティノの前へ、日本の国の霊が現れます。そして、デウスもこの国に来ては、きっと最後には負けてしまいますよとオルガンティノに語り掛けます。オルガンティノは、今日も侍が２・３人キリスト教徒になったと返しますが、老人の霊は、「それは何人でも帰依するでしょう。唯帰依したということだけならば、この国の土人は大部分シタアルタ（仏陀）の教えに帰依しています。しかし我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです」と切り返して、さらに、「事によるとデウス自身も、この国の土人に変わるでしょう。支那も印度も変わったのです。西洋も変わらなければなりません。我々は大木の中にもいます浅い川の流れにもいます。薔薇の花を渡る風にもいます。寺の壁に残る夕明かりにもいます。何処にでも、又何時でもいます。御気をつけなさい。御気をつけなさい。・・・」と言い残して消えてしまいました。

古事記をご存じの方でしたら、芥川が描写している日本に潜んでいる霊の力に納得できるでしょう。木にも、川にも風にも、夕明かりにも神々が宿っている。オルガンティノの使命を妨げている不思議な力は、古事記にも述べられている日本の神々のことなのです。

元ウクライナ大使の馬渕氏は彼の著作「新国体論」で、芥川が短編を通して訴えた「日本の力は破壊する力ではなく、造り変える力だ」という言葉の重要性を説いています。

芥川は短編で、老人の霊がキリストも日本に来ればやがて日本人になると述べています。キリストを日本人に変えてしまう力のことを、芥川は「造り変える力」と表現しましたが、この「造り変える力」こそ日本が外来の文物を受け入れる際の知恵だというわけです。これはとても重要な指摘だと思います。

しかし芥川はこの短編の最後で極めて重要なことを指摘しています。「キリスト教が勝つかそれとも神道が勝利するか、その決着は当時（この短編が書かれた大正１１年1922年頃）まだついていないとして、いずれ私たちの事業が決着させることになるだろう」と予言しているのです。この事業は実際に簡単なものではありませんでした。

当時のわが国は、伝来した西欧思想をわが国の実情に合うように造り変えて受け入れることに成功していなかったため、思想界が大いなる混乱状態に陥っていたのです。この決着は先の戦争を経て今日に至るも、まだついていないのです。

決着とは、一般的な意味での「勝つか負けるか」の二者択一の選択ではないと馬渕氏はいいます。日本文明の神髄であるわが国の伝統精神が勝つという意味は、ユダヤ・キリスト教文明との共存を図るということです。したがって令和の時代に決着をつけるべき課題は、ユダヤ・キリスト教文明の２１世紀的表現であるグローバリズムの攻撃的生き方と、わが国の伝統文化に基づく生き方との共存を図るということ。その共存の図り方とは、グローバリズムをわが国の調和精神に合うように造り変えて受け入れるということ、つまりグローバリズムを土着化することです。土着化を可能にするためには、わが国が失いつつある伝統文化に復古すること、即ち精神再武装がまずは必要なのですと、馬渕氏は強調されています。

失われた３０年という言葉が示すように、国力が衰退を続ける今日の日本です。かつて欧米のトレンドに乗り遅れるなと、日本も株主資本主義を積極的に会社経営に導入しました。その反面貧富の差は拡大し、国民の幸福度は減少し、自殺者は増加し、経済的デフレがこんなにも長く続いている状況です。今こそ一度立ち止まって、本来私たちの先人たちが作り上げてきた伝統的精神に立ち返ることが必要ではないかと私も思います。

特にここ数年は、グローバリズムの負の側面が様々な形で露わとなってきました。そんな中、日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一が社会的に見直され、2010年のJAL破綻時にその救済に無給で名乗りを上げた稲盛和夫氏が評価されてきています。

また現在、トヨタ自動車の豊田章男社長が世界中の幹部に対して「豊田綱領に帰れ！」と檄を飛ばし続けています。豊田綱領は、1935年に創業者・豊田佐吉の精神を文字として著わしたものです。参考までに以下ご紹介します。

一、上下一致、至誠業務に服し、産業報国の実を挙ぐべし
一、研究と創造に心を致し、常に時流に先んずべし
一、華美を戒め、質実剛健たるべし
一、温情友愛の精神を発揮し、家庭的美風を作興すべし
一、神仏を尊崇し、報恩感謝の生活を為すべし

これらの最近の動きは、私たちが歴史的に育み続けてきた伝統的なものを見失い、株主資本主義なる欧米流を導入し続けることにより招いた誤りに気付き始め、本来の日本の精神性に根ざした方策へと舵を切ろうとするものではないかと私は思うのです。

日本の精神性は一人一人に神が宿ることを思い、和と調和を重んじるという内容です。芥川の警鐘から百年を迎えた令和時代にこそ、わが国の伝統精神を再認識し、精神的な足場を固めることこそが、芥川が指摘した日本の造り変える力の発露の出発点であり、土着化へ向けての道だと思います。そういった日本の精神的なDNAに根ざした自分づくり、国づくりこそが世界で漂流する現下の私たちの目指すべき方向性ではないか、という思いを強くした令和５年の正月でありました。

ご意見・ご質問は青砥まで
gen.aoto@toyota.ch

空飛ぶ船が見れる島
ランペドゥーサ島

市居 卓哉さん

PICK UP 31
STADT, BERG ODER INSEL?
私のイチオシ、シェアします!

チューリッヒ空港からローマ経由で約３時間半。スイミンググッズが沢山詰まった荷物を抱えたイタリア人に囲まれて到着したのが、今回の目的地ランペドゥーサ島。イタリア最南端の島で、面積が20㎢しかない孤島である。日本の旅行本で「世界で最も美しいビーチ」として、フライングボートが表紙に取り上げられてから日本でも一躍有名になったリゾートである。実のところ、私も妻に薦められるまではまったく知らない島であった。

空港に着くと、長髪で真っ黒に日焼けしたホテルのオーナー自ら車でお出迎えをしてくれた。このホテルを選んだ理由は、スクーターがホテルでレンタルできることと、島で唯一の商業エリアまで徒歩圏内だったからだが、こじんまりとしたホテルを選んだことで、島に住むオーナーと種々話すことが出来たので、結果的に“当たり”だったと思っている。

ランペドゥーサでは、魚と戯れながら泳ぎ、シーフードを食べる・・・だけだが、これだけで欧州の名だたる有名観光地と同じくらいの魅力がある。我々のスケジュールと重ねながら、島のお薦めを列挙させて頂く。

1日目はチェックイン後、島のメイン通りを歩く。午後から、スクーターで島を一周（1時間で回れる！）し、最も有名なビーチ“ラビットビーチ”（Spiaggia dei Conigli）で泳ぐ。そこそこの大人になって、スクーターで二人乗りしながら南国を走ること自体が田舎の夏休みのようで楽しいのだが、海を見ながら1時間で周遊できるサイズ感がちょうど良く、簡単に下見ができてしまった。メインストリートは数百メートルしかないが、一応観光地なので、お土産屋、レストラン等は一通りそろい、比較的価格も良心的である。スクーター運転中に勝手に撮影されている“記念写真”も、このメイン通りの写真屋で掲示されており、購入することもできる！夕暮れに立ち寄った街外れのウミガメの保護施設も興味深かった。沢山のボランティアが漁師の網にかかったり怪我をして保護されたウミガメの世話していた。人間が海に捨てたゴミを誤食し傷ついたウミガメが多く、心が痛んだ。

フライングボート現象

2日目と3日目の日中は、貸し切りボート（他のお客８名と一緒）で、島を一周回りながら、海上で停泊して食事＆遊泳。このボートツアーこそが、私たちにとっての島のハイライト！船舶免許などがあれば、ボートを貸し切ることも可能だが、我々のような庶民にはツアーで十分であった。集合時間に指定のボートに行き、他の乗客と一緒に乗船。各々好きな座席を確保し（デッキにバスタオルを広げて寝そべって日焼けしている人も）、出港。船長のおすすめポイントに数ヶ所停泊するのだが、その場所がどこをとっても絶景。透明度抜群の海に浮かぶ船は、本当に宙に浮いているようで、まさにフライングボート！旅行本の表紙通りの風景に驚いてしまった。

海老はいただいたら、頭や尻尾など殻はそのまま海へ投げ入れてお返しするスタイル

昼食は、専属のコックが船内で作った出来立て料理を振る舞ってくれ、他のお客と酒を飲み交わしながら盛り上がる。大半の客がイタリア語しかできなかったが、イタリア語ができない我々でも満喫できた。何より、この昼食がブラボー！で、その辺の有名イタリアンは太刀打ちできないレベルだった。実際、船ツアーはそのコックのレベルによって善し悪しが評価されている節がある。

夕飯は屋台や街のレストランで頂いたが、屋台で出てくる新鮮なシーフードが絶品で、結局２夜連続で同じ屋台でお世話になった。オリーブオイル、レモン、塩、ピスタチオでいただく新鮮なカルパッチョ。特にマグロが新鮮で美味しかったが、個人的には醤油を持参されることをお勧めしたい。屋台でアペロ、レストランで夕食なんてのも、良いと思う。

そして4日目の最終日は、朝からいくつかのビーチをハシゴして泳いだ。正直なところ結局は同じ様な絶景ビーチなのだが、いくつかあるビーチでオススメなのはやはりラビットビーチだ。駐車場から少し距離があり、貸しパラソルを持って砂浜まで歩かなくてはならないものの、砂浜と浅瀬が比較的広い。ビーチに着く前に高台から全体を見渡せるのも良い。ボートの侵入も無いので、波も穏やかで小さい魚も多くシュノーケリングしやすかった。他のビーチも一長一短あるだろうが、まずはラピットビーチを訪問することをお勧めしたい。小さい子どもが居る家族でも、このビーチに足を踏み入れるだけで「来てよかった！」と感じるだろう。

という具合に、わずか4日間の現地滞在はあっという間に終わってしまった。1週間居ても退屈になったと思うので、結果的にこれくらいがちょうど良かったのかもしれない。観光地を巡りながら欧州探索するのも良いが、こういった一点集中の旅も、時には良いと思う。皆さんの旅情報の一助になれば幸いである。

大使館関係のお知らせ

●2022年11月末に藤山美典新大使が在スイス大使（リヒテンシュタイン兼任）に着任
12月21日にミュラー在チューリッヒ名誉総領事と面会
12月23日にヘルプスイス日本商工会議所会長と面会

●領事出張サービス
チューリッヒでの申し込み期限は過ぎた為、別都市の情報を記載します。
・バーゼル　3月8日（申し込み2月21日必着）
・ザンクトガレン、リヒテンシュタイン、クール　3月15日（申し込み2月28日必着）
・ツーク、ルツェルン　3月16日（申し込み2月28日必着）

詳しくはhttps://www.ch.emb-japan.go.jp/itpr_ja/ryojisvc.htmlにてご確認ください

グリュツィ　ミッテナン。皆さん、こんにちは。ジュネーブとチューリッヒの銀行に長年勤務してきたので、フランス語やドイツ語はペラペラです、と言いたいところですが、恥ずかしながら未だに挨拶程度以上には上達せず、このままモノにならずに終わりそうな元金融マンです。

編集部の方から何か金融関蓮の連載でも、とのご依頼をいただいたので私の経験した古き良き黄金期のスイス資本市場を振り返りながら、現在に到るスイスの金融事情を４回程度に分けて記述してみることにしました。

黄金期のスイス資本市場と日本企業

スイスの資本市場と日本企業とは1980年代以降に特に関係が深まり、日本企業にとっては安定した資金調達先として、又スイスの金融界にとっては引き受け手数料という大きな収益だけでなく、優良な日本株式のスイス投資家への提供という側面から、双方ともにウィンウィンの関係が構築されてきたと言えます。日系の中堅企業の起債がスイスフラン建てで、スイス市場で行われるのに対し、日系企業の大型起債はロンドン市場で、ユーロドル建てで行われる、というように発行金額によって資本市場を分けて起債が行われていました。

資金調達の形態としては、転換社債（発行会社の株式に転換可能債券）とワラント債（ワラント＝新株引き受け権付き社債）の発行による資金調達で、これはエクイティーファイナンスと呼ばれ正にその全盛期でした。当時は右肩上がりの日本の株式市場の上昇期であったこともあり、「引受幹事会社」からすれば大きな引き受け手数料、「投資家」からすれば株価上昇を背景とした、債券価格の値上がりによる大きな利益の獲得、「発行企業」からすれば市場実勢の金利を遥かに下回る低利率（低発行コスト）での資金調達が可能となっていました。更には株価上昇に伴う転換社債から株式への転換によって発行企業の財務体質が強化されるという、絵に描いたような理想形のエクイティーファイナンスが続いたのです。

いわゆる近江商人の哲学である、「売り手によし、買い手によし、世間によし」という「三方よし」の理想的関係が長期間続く、正に黄金期ともいえる時期でした。かつての銀行貸付による産業資本の供給、という間接金融から、企業自らが資本市場で資金調達を行う直接金融が、日本国内というより海外の資本市場で確立された時期にも当たります。

当初は現在のUBSやCredit Suisseに加えバーセルに本拠を持つSBC（後にUBSに吸収）の３大銀行が引き受け主幹事を独占していましたが、ようやく日系やフランス系の外国銀行にも主幹事が解放されました。連日と言っていいほど起債関係者が調印式のためにチューリッヒやジュネーブを訪れていて、まさに日本株ブームに沸いた時期でした。引き受け案件は、主幹事が引き受け幹事団（シンジケート団）を結成しその販売に当たりますが、スイス国内外の金融機関や大手投資家からも購入申し込みが殺到し、発行と同時に引き受け額が「瞬間蒸発」することもありました。起債の払込が終わるまでのプライマリーマーケット（発行市場）での取引価格にプレミアムが付く人気銘柄も多く、セカンダリーマーケット（流通市場）に移ると株価の先高期待もあって債券価格が更に上昇し、投資家にも大きな利益がもたらされました。これらの市場関係者のみならず、ホテル業界はじめ、レストランや高級宝飾店、更にはハイヤー会社に至るまでスイス社会全体も大いに潤いました。

この良き時代も1990年初めにバブルが崩壊し、株式市場の暴落とともに日本企業のエクイティーファイナンスも終焉を迎え、スイスの資本市場は元の静かな市場に戻りました。スイスの街の様子は当時も今も全く変わっていませんが、多くの日系金融機関が進出し賑わいを見せていたスイスの金融街も、今やその大半が撤退してしまい、兵どもが夢の跡、というどこか感傷に耽る気持ちにもなります。

（次回へ続く）

友人のスイス人ご夫妻が'78年からの関西在住12年間に日本各地で精力的に収集し、30年以上も身近で大切にしてきた価値の高い骨董+民芸品を手放すことにしました。彼等同様大切に使って下さる方を探しています。
カタログは　https://www.artworkarchive.com/rooms/boris-jost/0896fc
ご興味おありの方は**sayori9214@gmail.com**
国石 恵へお願いします。　《国石》

GlobAS Relocations Europe GmbH

スイスからのお引越しは、グローバス・リロケーションにお任せを！ 海外・国内及び欧州内引越しサービス、譲渡/転売品の市内輸送、処分品廃棄等の関連付帯サービスも承っております。ご成約特典として空港宅配無料クーポン、JAL・ANAマイル積算サービスのご用意がございます。詳しくはお問い合わせ下さい！

GlobAS Relocations

Email: zurich@globas-relo.com
HP: http://www.globas-relo.com
Tel: +49(0)89-189-386-21（日本語直通）担当：三嶋

JCZ応援企画

「女性ホルモンと現代女性の為のヘルスケア」

ヨーロッパ在住日本人女性の皆様に向けて、日本の産婦人科医（対馬ルリ子）x 美容家（吉川千明）のオンライン講演会を開催する事が決定いたしました。

開催日時: 2023年3月12日（日）10時30分~12時
（フランス時間）ZOOMオンラインセミナー
お申込み：https://bit.ly/3FiCYOJ（参加費無料）
（ZOOMセミナーはメールで届く
ZOOM URL をクリックするだけて参加できます）

<内容>
・ 女性ホルモンと女性の健康（概論）
・思春期と月経の問題、低用量ピルについて
・子宮頸がんと子宮頸がんワクチンについて
・妊娠前検査と出産後の体のケア
・更年期とホルモン補充療法（HRT）
・老年期と骨粗鬆症と尿もれ、骨盤底筋ケア
・ 検診の重要性
・ Q&A（事前調査）

詳細はこちらまでhttps://zaifutsunihonjinkai.fr/event/event-73699/

JCZ主催 書き初め・餅つき大会
（１月８日開催）
－レポート－
於）チューリッヒ日本人学校

小雨の降る中、し～んと静まり返った日本人学校。
「あれ？日にちを間違えたかな？」と思うほどだが、体育館に入り口案内の貼り紙を見つけて安堵し、中に入ると、大人も子供も集中して筆を握っている！お習字恐怖症の私でも、取材でなければふらっと座って書きたくなるような、書道道具一式が揃っている空席（インフルエンザで残念ながらの欠席者が5人いたそう）がウェルカム！って言ってるみたい。そんな安心感の中で、ヒルドボルト勝美先生の批評会開始ギリギリまで、みんな何枚も何枚も書き続けていた。参加者24名それぞれのエネルギーが表れた作品は、どれも光って見えますね！（写真参照）

青砥会長のエネルギッシュな挨拶を挟んで、餅つきが始まった！お米は「生のエネルギー」を象徴し、その「生」を杵で何度もついたお餅を食べるということは、凝縮した「生」を新年の初めに戴くということだ、と日本人学校の先生が説明して下さり、この歳になって初めて知ったのでした（汗）。

61名の参加者は子供も杵を振り上げ、みんなで餅つき体験をして、つきたてのお餅を戴きました。磯部巻き（海苔はすぐなくなっちゃったけど）、大根おろし、お汁粉、納豆、甘味醤油、沢庵まで至れり尽くせりの準備をして下さった日本人学校の先生方やボランティアの方々の温かさに包まれたお正月の締めくくりになりました。コロナ禍で２年中止されていたので、未体験の方も多いかもしれません。今年行かれなかった皆様は、是非来年行ってみて下さいね！

チューリッヒ日本人会
チューリッヒ日本商工会共催

ゼクセロイテン祭り「キンダーパレード」
参加申し込みご案内

参加ご希望の小学1年生以上のお子さまは３月13日までに下記の①～⑨の必要事項を記入し電子メールにてお申し込み下さい。（要保護者同伴）

チューリッヒ日本人学校
ゼクセロイテン・キンダーパレード担当（向井）
Email ： jszurich@bluewin.ch

【申込記入事項】
①参加児童生徒名【ローマ字つづり】
②性別
③年齢（ゼクセロイテン当日時点）
④法被レンタル希望(有・無)
⑤保護者名【ローマ字つづり】
⑥住所
⑦携帯電話番号（当日の緊急連絡用）
⑧メールアドレス
⑨チューリッヒ日本人学校のホームページでの写真や動画の掲載（可、不可）

JCZ11月イベント 感想文

『OKAO筋トレ』体験レッスンに参加して

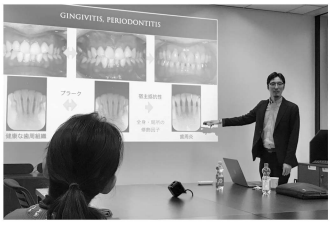
美への憧れは女性ならば誰でもあるでしょう。レッスンを一回受けただけで表情が変わるそうなので、大きな興味を抱いて参加させていただきました。レッスン前にその確認のために各自写真を撮っておきました。なるほど先生は笑顔がとてもお綺麗。こんな美人さんになれるならば、と誰でも思います。普段使わない筋肉を使い、表情筋が働くために手のひらでお顔を支える訓練、呼吸法も加えます。徐々にお顔も体もぽかぽか。あっという間の1時間、再びセルフ写真を撮りました。以前とは何かが違う。スクリーン上の参加者は皆生き生きした表情になり、目が以前よりも大きくなったのでは？　これを毎日続けたら表情は変わっていくのかも。この筋トレはJCZの女性の間でブームになるかも。四本先生、JCZ委員の皆様、楽しい企画をどうもありがとうございました。（MD）

JCZ12月イベント 感想文

歯にまつわる講演会に参加して

2022年12月15日、福場先生の講演会に参加しました。私は子供の頃から虫歯に悩まされ、長年通院していたため、歯医者さんからは、「私の孫みたいだね」と言われていました。今回の講演会の事をEDELWEISSで知った時、まさに私に必要なお話が聴けると申し込みました。福場先生のご専門は歯周病やインプラント治療でチューリッヒ大学に留学中です。

歯を失う原因の歯周病や虫歯を防ぐことがとても重要で、歯磨き粉よりはブラッシングが大切で、また定期的な歯石除去も大切だそうです。日本では歯を残す治療をしますが、海外では歯を抜いてしまうようです。講演後は先生を囲んでお茶をしながら丁寧に質問にも答えていただきました。ありがとうございました。（YM）



チューリッヒ発JAL経由便がおトクです！

●パリ、ロンドン、フランクフルト経由便ご利用の場合
◎機内Wi-Fi無料キャンペーン（2023年3月2日ご搭乗分まで）
◎日本での空港宅配無料サービス、日本ご出発時羽田・成田ラウンジ利用キャンペーン※

要事前お申し込み

●ヘルシンキ経由便ご利用の場合
◎日本での空港宅配無料サービス、日本ご出発時羽田やヘルシンキ空港 ASPIREラウンジ利用キャンペーン※

※詳細はご利用条件とともにWEBサイトにてご確認ください。なお上記キャンペーンについては急遽変更の場合がございます。

詳しくはこちらから

詳細・ご予約は www.jal.co.jp/ch/　JALヨーロッパ予約センター 0844-888-777（スイス国内・日本語専用ライン）

JAPAN AIRLINES

美のプリズム Vol.19

リートベルク美術館
芸術が辿ってきた道

「チューリヒでお勧めの美術館はどこですか？」と尋ねられると、クンストハウスよりも真っ先に名前を挙げるのは、リートベルク美術館である。インド、東南アジア、中国、日本、オセアニア、古代アメリカ、そしてアフリカなど非ヨーロッパ圏の美術を専門とする市立美術館だ。特筆すべきは、多岐にわたるコレクションの質と、それと拮抗するように企画される学術的調査に基づいた意欲的な特別展の数々である。目や頭で観る者を魅了するリートベルク美術館は、チューリヒ市民の誇りといえよう。

美術館の創設には、ドイツ出身で1926年からアスコナに移住していたエドゥアルト・フォン・デア・ハイト男爵(1882–1964)が関係している。彼が膨大なコレクションをチューリヒ市に寄贈したことで美術館の歴史が始まったのだ。銀行家でアート・コレクターであったフォン・デア・ハイトは、1908年に仏頭を購入し、それを皮切りに1920年代にはアフリカやオセアニアのいわゆる民族学コレクションを拡充させていく。こうした作品は、当時、様々な民族の生態と文化を理解するための民族誌学の教材として展示され、少なくとも美術館では「芸術作品」としては扱われず、「（西洋人が確立した）ハイ・アート」に対して「（非西洋人による）プリミティヴ・アート」と呼ばれていた。一方、20世紀初頭のパリではピカソやブラックらがアフリカの彫刻からインスピレーションを受けてキュビスムの様式言語を発達させていた。「プリミティヴ・アートにこそ人類の根源的な表現力が溢れ出す」という礼賛は、ごく一部の先見の明のあるアート関係者だけに解された秘密の呪文であった。

フォン・デア・ハイトの芸術信条を表す美しいラテン語がある。「アルス・ウナ」。「芸術はただひとつ。そしてただひとつであるゆえに、地球上のあらゆる文化と民族を結びつける」という信条である。彼にとって「ハイ・アート」や「プリミティヴ・アート」という垣根は全く意味を持たなかった。アートは普遍的な価値を生み出し、世界や人間を分断させるのではなく、再び統合する力を宿すものであると考えていたからである。当時はなかなか理解されなかったこの考え方は、現在、世界中で共感される価値観となった。フォン・デア・ハイトの「アルス・ウナ」という不動の価値観、そして彼の審美眼によって選ばれた作品たちが、リートベルク美術館のコレクションの基礎となっている。それゆえ、この美術館に足を一歩踏み入れると、高貴な精神の柱に貫かれるような気になるのだ。

さて、現在開催中の企画展は一風変わっている（会期は2023年6月25日まで）。日本の浮世絵やアフリカの仮面、または中国の翡翠などのオブジェをテーマにした展覧会ではないからだ。そうではなく、フォン・デア・ハイトを筆頭に様々なコレクターが、どのような経緯で作品と出会い、なぜ購入するに至ったのかあるいは贈与されたのか、それが一家に代々受け継がれたこともあれば売却されたこともあり、最終的にどのようにしてリートベルク美術館のコレクションになったのか、いわば「芸術が辿ってきた道」を目に見えるようにする展覧会である。コレクションの歴史（時間の道）を追体験するために、展示会場にも順路が示された道が敷かれている。例えば、オセアニア美術のコーナーには、スウェーデン人のネル・ヴァルデン（1887–1975）というコレクターのキャビネットが設えられている。そこには、フォン・デア・ハイトがリートベルク美術館に寄贈したパプア・ニューギニアの大きな仮面が飾られている。美術館のコレクションの中でも一際目をひく作品である。仮面の横には、1920年代のベルリンの彼女のアパートの一室を撮影した写真も展示してある。その部屋には夥しい数の民族学のオブジェが犇めき合い、部屋の中央では秘教の信徒のような眼差しでネルが遠くを見つめている。彼女の背後には、祭壇のように設えられた棚にパプア・ニューギニアの仮面が鎮座している。パプア・ニューギニアからどういう道筋を経て仮面はネルのベルリンの部屋にやってきたのだろうか？

《大型仮面 kepong》パプア・ニューギニア ニューアイルランド島 19世紀
エドゥアルト・フォン・デア・ハイト寄贈
リートベルク美術館

《ネル・ハイマン=ヴァルデン ベルリンのランケ通りの自宅》 1926年
©bpk / Staatsbibliothek zu Berlin

なぜベルリンにあった仮面が今ではチューリヒにあるのだろうか？　フォン・デア・ハイトとネルはどういう関係だったのだろうか？　ひとつのオブジェと写真から想像はどんどんと膨らんでいく。

ネル・ヴァルデンの最初の夫、ヘルヴァルト・ヴァルデン（1879–1941）は詩人で作曲家でもあり、20世紀前半の美術界を牽引した人物だった。第一次世界大戦前のベルリンにおいて前衛芸術家たちを支援し世に売り出すため、1910年に雑誌『Der Sturm（嵐）』を創刊し、1912年には同名のギャラリーを開設した。表現主義、未来派、ダダイズム、新即物主義などの若い作家、画家たちがヴァルデンのもとに集まり、そして巣立っていった。ネルは「有名な」ヘルヴァルトの影に隠れて、長いことDer Sturm出版社・ギャラリーの脇役として認識されてきた。しかし彼女は、第一次世界大戦中、ドイツ軍最高司令部の報道本部で政治記者および翻訳者として働くことで、ギャラリーを財政的に維持しただけではなく、戦時中にもかかわらず商売を広げていった。若き日のパウル・クレーも雑誌『Der Sturm』に作品を発表し、ギャラリーで作品を展示・販売した。彼の最初のキャリアはDer Sturmのおかげで築かれたといってよい。つまり、ヘルヴァルトは作家や画家たちのネットワークを作り上げ彼らの仕事を促進させたが、肝心の屋台骨はネルが支えたのだ。彼女自身もDer Sturmに属する画家であり、そして何よりもアート・コレクターであった。経済的に自立した女性コレクターは、富裕層の男性が牛耳る美術市場では非常に珍しい存在であったし、さらにいえば、非ヨーロッパ圏の美術品をドイツで初めて収集したコレクターの一人に彼女は数えられる。

ナチスが政権を掌握する前年の1932年、ネルはベルリンの大きな屋敷をたたみ、アスコナに建設中の家に移り住むために、彼女の膨大なコレクションをスイスに移送しようと計画した。つまり結果的に、ナチスがモダン・アートや民族学のオブジェを略奪・破壊することから自分のコレクションを「疎開」させ守ったことになった。後に、彼女の民族学コレクションの中から選りすぐりの数点を購入したのが、ベルリン時代から親交のあったフォン・デア・ハイトであった。

リートベルク美術館のコレクションの基礎には、フォン・デア・ハイトのコレクションがある。さらにその原初の一部をネルのコレクションが担っている。コレクターとコレクションの間には様々なストーリーが紡がれ、想いが詰まる。ひとつのオブジェを通じて過去と現在が瞬時に繋がるのだ。

柿沼 万里江（パウル・クレー・センター研究員）
Zentrum Paul Klee, Monument im Fruchtland 3, 3000 Bern

Wege der Kunst
Wie die Objekte ins Museum kommen
2023年6月25日まで
Preis：CHF 18 / CHF 14 reduziert
https://rietberg.ch/ausstellungen/wege-der-kunst

JCZ事務局からのお知らせ　www.japanswiss.ch

JCZ２月企画　『Dinner witth Hayao & Ayumu & Teruki』

グラスホッパー・クラブ・チューリッヒでは日本勢の川辺、瀬古、原、３選手が活躍しています。その3人をお招きした「ご飯会」を開きます。前号の歩夢選手のインタビュー記事にあるように、「同じくスイスで頑張っている人達のお話が聞きたい！」というリクエストで実現するこの企画、サッカーファンでなくても意気投合できるかも・・・。

日時　：２月７日 (火)　18:00 - 20:30
場所　：レストラン美味
　Seefeldstr. 25, 8008 Zürich
参加費　：60 Fr.
　（飲み物・デザート等は各自払い）
申し込み：JCZ HPイベント申込フォーム、
　またはkikaku@japanswiss.chへメールにて

定員になり次第締め切りますのでご了承下さい。

アフタヌーンカフェのお知らせ

2023年も始まったかと思ったら、久しぶりのJCZの新年会も終わり、2月になりました。スキー休暇の季節ですね。お時間を見つけてJelmoliのカフェでおしゃべりしましょう。どなたでもどうぞ。

日時：２月9日（木）14:00−16:00
場所：チューリッヒJelmoli　３Ｆのレストラン
申込：JCZ HPイベント申込フォームより
　またはメールにて、kikaku@japanswiss.ch

JCZクラブ活動　歩こう会 2022 活動報告

コロナ禍で人と会うことすら制限されていた状況を憂いた青砥会長夫人が幹事となって発足した「歩こう会」は、2022年も以下のように毎月20人前後の参加者と共に開催されました。

１月23日	Flumserberg
２月27日	Braunwald
３月27日	Three Castles, Brunegg to Habsburg
５月29日	Triemli - Albis Passhöhe
６月19日	Flumserberg
７月31日	Bödmerenwald
８月28日	Engelberg
10月30日	Atzmännig
11月27日	Remetschwil

毎月楽しみに参加されている方々から、喜びの声が寄せられています。ハイキングに興味のある方は以下のメイルアドレスにご連絡下さい。
Irène Aoto　ireneaoto@gmail.com

Events & Festivals
チューリッヒ近郊お出かけ情報

各URLの詳細は、 www.japanswiss.ch
「最新ニュース」でご覧下さい。

＊第１回ピアノフェスティバル　Le piano symphonique
2月7~11日　　於）ルツェルンKKL
https://sinfonieorchester.ch/de/klavierfestival-le-piano-symphonique/
アルゲリッチ、ブニアティシヴィリ、ハンプソン他

＊アニメ映画サウンドトラック・コンサート
２月10日　18:00
Zunfthaus zur Zimmerleuten　Limmatquai 40　8001 Zürich
https://feverup.com/m/105700
スタジオジブリからワンピースまで

＊チューリッヒ歌劇場　www.opernhaus.ch
今月の注目公演！
ドニゼッティ作曲《ロベルト・デヴェリュー》新演出
2月5、9、12、17、22、26日
今月のおすすめ！
チャイコフスキー作曲《エフゲーニ・オネーギン》
2月10、16、19、24日
バレエ「On the Move」
2月2、4、11日
ラフマニノフ生誕150周年記念コンサート
2月12日　ノセダ指揮

バジャマン・ベルナイムが歌うレンスキー役！

＊トーンハレ　www.tonhalle-orchester.ch
2月8~10日　19:30　ヴェルザー＝メスト（指揮）シューベルト「交響曲第２番」、R.シュトラウス「家庭交響曲」
今月の注目公演！
2月9日 12:15　室内楽ランチコンサート　笙の佐藤尚美も共演
今月のおすすめ！
2月26日 19:00 マウリツィオ・ポリーニピアノリサイタル

＊バレンタインデー・ディナー　2月14日
キャンドルディナー
Carlton Restaurant & Bar
Bahnhofstrasse 41　8001 Zürich
www.carlton.ch/de/valentinstag/
2人きりにもなれる
Restaurant Adlisberg
Adlisbergstrasse 75　8044 Zürich
www.adlisberg.ch/valentinstag/
コースごと合うドリンクを
Sablier Rooftop Restaurant & Bar
The Circle 23, 8058 Zürich-Flughafen
www.sablier.ch/de/valentinstag/

＊チューリッヒ謝肉祭　2月24~26日
Hirschenplatz, 8001 Zürich
https://zurichcarneval.ch/wordpress/

編集後記

2023年新春号は、Kette番外編としてトーンハレ管弦楽団からのお知らせを全面で掲載するため、編集後記やJCZデータを前ページに移しました。当楽団は会員ではありませんが、前回、今回と新年会の景品をご提供頂いたり、3月には共催イベントも企画中なので、音楽好きな方には朗報かも？

さて、今号のレイアウトは新しくレイアウトチームに加わったボッツィー二直美さんが担当しています。今まで12年間レイアウトを務めてきたアーノルド千津子さんはしっかり引き継ぎを済ませ、今後は広告及びHPコーディネート担当業務を、後任が決まるまで対応してくれます。また、他にもお手伝いのご提供をお声がけ頂いています。JCZで何か一緒にやってみよう！と思って下さる方は是非ご一報下さい。みんなで楽しく、有意義な会にしていきたいと思っています。　（SN）

広告掲載のご案内

チューリッヒ日本人会 Japan Club Zurichでは、会員の方からのお知らせ・広告の掲載、フライヤー等の会報同封配送を、有料（一部無料）で随時受け付けております。詳細については編集部までお気軽にお問い合わせください。

伝言板コーナーをご利用ください

200文字以内のお知らせ・ご案内は無料で掲載いたします。掲載内容責任者のお名前（会員に限る）を入れた原稿を**毎月10日**までに編集部にメールにてお送りください。

●JCZでは広告・フライヤー・伝言板の記載情報については責任を負いかねます。

JCZ会報誌エーデルワイス
2023年2月号
発行責任者：青砥 玄(会長)
編集：中 東生　阿部 牧子
　ボッツィー二直美

●編集部専用メールアドレス●
edelweiss@japanswiss.ch

チューリッヒ日本人会
JCZ Japan Club Zurich
Office of Honorary Consul General of Japan
Utoquai 55, 8008 Zürich
www.japanswiss.ch
jcz@japanswiss.ch

日本の伝統と西洋のアバンギャルドとの間に橋を架ける

細川 俊夫

私達のクレアティヴ・チェアが織り成す
特別な音の世界を、
シーズンを通してご体験下さい。

2023年2月9日（木）
《鳥たちへの断章 III》

2023年3月1、2、3日（水、木、金）
オペラ《海、静かな海》より「間奏曲（4つの打楽器のための）」

2023年3月26日（日）
室内楽（フルート、ハープ、ピアノ、打楽器）

2023年3月29、30日（水、木）
《瞑想 ― 3月11日の津波の犠牲者に捧げる》

2023年5月25日（木）
《開花》

2023年6月29、30日（木、金）
オルガン協奏曲《抱擁 ― 光と影 ―》
スイス初演

2023年7月1日（土）
《雲景》

詳しくはHPをご覧下さい。

TONHALLE ORCHESTER ZÜRICH

PAAVO JÄRVI
MUSIC DIRECTOR

Stadt Zürich Kultur　FREUNDES KREIS　MERBAG　CREDIT SUISSE　tonhalle-orchester.ch